

ドイツで学んだ歴史に対する姿勢と実践

前デュッセルドルフ日本人学校教諭

上尾市立南中学校 教諭 深田 耕平

キーワード：在外教育施設、デュッセルドルフ、歴史、平和教育

1. はじめに

縁あってドイツのデュッセルドルフという場所で教鞭をとる機会をいただいた。当初は、なんとなく東南アジアや南米などへの派遣を頭に思い描いていたため、派遣先が決定したときは、デュッセルドルフが、どういう場所なのか、ドイツはどういう国なのか、大したイメージもわからず、内心当てが外れたような印象を持っていた。しかし、中学校の社会科担当である自分にとって、この地に派遣される意味はなんだろうと、考えたときに、見るものや体験するものが違った意味を持ち始め、今ではドイツに派遣されたのは必然であり、ここで学ぶべきだったのだという思いに至っている。ドイツは、かつて第二次世界大戦を引き起こし、ナチスによるユダヤ人迫害、ホロコーストという負の歴史を抱えている。その事実と向き合い、二度とそのようなことを繰り返さないという決意を随所を感じる事が出来た。ここでは、私が派遣された日本人学校の概要と、その派遣期間に見たり、実践の中で感じたその一部を紹介したい。

2. ドイツにおける歴史への取り組み

(1) 強制収容所、平和関連施設の保全・公開

ドイツでは、ナチス関連の負の歴史に、目を閉じるのではなく、保存し積極的に公開していく事で、その事実を語り継ぎ、人々の記憶から忘れ去られることのないように様々な形で努力している。派遣期間中に、こうした施設には数多く足を運んだ。アウシュヴィッツ強制収容所やブーヘンヴァルト強制収容所やダッハウ強制収容所、そしてベルリンユダヤ博物館や、アンネ＝フランクハウスなどがそれである(アンネ＝フランクハウスはオランダのアムステルダムにある)。修学旅行でブーヘンヴァルト強制収容所を訪れた際にも、胸がしめつけられるような思いを感じたが、一人でダッハウ強制収容所に行った時には、きれいになってはいるものの、その場所に立つと、当時の光景がまるで目の前で繰り広げられているかのような錯覚に襲われ、いてもたってもいられなくなった。



アウシュヴィッツ強制収容所には、公認ガイドを認定しており、世界中から訪れる人に、そこで行われていたことをつぶさに伝え、二度とこのようなことがおこらないように、一人一人が考えていくことの大切さを伝えている。私も、日本人唯一の公認ガイド、中谷剛さんのガイドで回ることができ、ありありと当時の様子を知る事ができた。修学旅行で訪れたブーヘンヴァルト強制収容所の敷地には、ユース hostelも併設されており、ドイツの学校では、こうした施設に積極的に訪れ、その残酷さを知る事で再発の防止に努めているとのことだった。

ベルリンのホロコースト記念碑を訪れた際には、一見アーティスティックなモニュメント広場のような空間になっており、何も知らずに訪れれば見過ごしてしまいそうな作りなのだが、一つ一つ石の高さ

を、

が違っており、その場所にいることでホロコーストの歴史について考えさせるような工夫がされていた。このようにドイツでは日常生活の中に歴史を忘れないための工夫が様々な形でなされており、その決意の程が感じられる。

(2) 学校教育での扱い

ドイツの学校での平和教育の中心は何をおいても、ナチスの過去をどう教えるかである。ただ、平和教育の内容や方法については、全国であらかじめ決まった内容があるのではなく、各学校、各教員の裁量に任される余地が多い。

ドイツでは学習指導要領は各州ごとに作られ、教科書の認可も各州ごとに行われる。また教科書の採択は各学校ごととなっている。ナチスの過去について中学校2、3年くらいのときに1年間かけて学ぶ学校が一般的である。

歴史の場合、古代、中世、近代、現代と4つに大別され、教科書も4冊ある。そしてドイツは、その歴史教科書についても、周辺各国と専門家同士によって記述内容を検討し、歴史認識を共有する作業をていねいに積み上げてきている。

また、ドイツには政治教育という日本でいう「公民」にあたる科目があり、民主主義や人権、平和などについて学ぶ。この政治教育の時間を使って、やはり1年間、ナチスのことをじっくりやるという学校も多い。つまり、第二次世界大戦期について、歴史的事実について1年間、政治教育として1年間。合計2年分の時間をこの時期の学習に費やす形になっている。その上、その学習方法も、日本のように決して年号や用語の暗記ではなく、討論を主とする内容で、各自の考えを持ち、深める事に主眼が置かれたものになっている。こうしたところに、ドイツの過去に向き合う姿勢が、いかに本気であるかが表れている。

3. 日本人学校における自らの実践

以上のような調査と並行して、それらの内容を生かして、自らの授業実践をいくつか行ってきた。主な実践としては、以下のようなものを行った。

(1) 学校祭第6学年劇「杉原千畝物語」

デュッセルドルフ日本人学校において、年間を通じて最大の行事は学校祭である。学校祭では、全学年が劇や合唱・合奏などの出し物を行う。派遣初年度に担当した小学部6年生で、学校祭学年劇の題材に、第二次世界大戦期の日本の外交官、杉原千畝を取り上げた。小学部6年生は、修学旅行で、ブーヘンヴァルト強制収容所を訪れる。その際、社会科の歴史教育と併せて、事前学習として、当時のユダヤ人迫害、日本の東アジア支配についても学習した。その中で、ユダヤ人に味方する人が全くいない、孤立無援のリトアニアという地にあって、本国である日本の命令にも背き、ユダヤ人に日本通過のビザを発給し、6000人以上の命を救った日本の外交官、杉原千畝について学んだ。その事前学習や、劇を作り上げる過程において、子どもたちは、社会の流れに逆らって自分の信念を貫くことのむずかしさと尊さ、そして平和の大切さと、それは自分たちの不断の努力によ

ってのみ得られるということ学んだ。



(2)ドイツ国際平和村訪問

小学部6年生では、オーバーハウゼン市にある、ドイツ国際平和村に訪問し、平和村の子どもたちと交流する。平和村では、内戦で傷ついた子どもたちを預かり、ドイツの医療を受けさせ、自立へ向けて教育を施し、自国へ帰す活動を行っている。そこでは、子どもたちを治療し、自国に帰って、自立して生きていけるようにと、考えて、治療および教育を全て寄付や補助金のみで運営している。事前学習として、世界各地の紛争についてや、平和村の設立からの経緯や活動内容を学んだ上で、子どもたちに喜んでもらえるよう、遊びを考えて交流活動を行った。子ども達は、内戦で傷ついた子ども達を目の当たりにして、それまで学んできた平和の大切さを改めて強く感じたようで、振り返りの時間には、「ぼくたちで平和な世の中を作っていかなきゃいけないだね。」ということのを口々に発していた。

(3)総合的な学習の時間パネルディスカッション「平和のためにできること」

派遣2年目にも小学部6年生を担当させていただくことになり、2年目は、社会科の歴史学習や、修学旅行でのブーヘンヴァルト強制収容所訪問に加えて、①、②のような学習を行った後で、さらに総合的な学習の時間を使って、「平和に向けてのアクションプラン」と題して、平和な世の中をつくるためには、自分たちには何ができるのか、ということ学年で話し合い、そこでまとまった案を実行に移すという取り組みを総合的な学習の時間で行った。はじめは、「平和とは何だろう？」という、根本的なことへの問いから始め、平和を実現するためにしなければならないことをたくさん挙げて、それをグループ化し、それぞれのグループに分かれて、自分たちにできるアクションプランを考えた。さらにその案をパネルディスカッションの形で討論し、実際に取り組めそうな案を採択した。そこで実際に採択されたのは、ドイツ国際平和村への支援物資の募集と、ユニセフ募金であった。それぞれ、全校および父母会にも呼びかけ、多くの寄付や募金が集まった。卒業間際の忙しい時期であったが、子どもたちは懸命に取り組み、平和へ向けて、自分たちができることがあるということを感じることができた。



4. 考察

以上の調査を通して、特に強く感じたことは、ドイツには、過去の事実としっかりと「向き合う」という姿勢が強烈に存在しているということである。ドイツは、自国に都合の悪い事実から、目をそらさずに、とことん追求するという姿勢を一貫してくずしていない。また、周辺諸国と、共通の教科書作りにもみられるように、独りよがりな見方もしないように努めていることも特筆すべきことである。学校の授業においても、じっくりとその事実と向き合う時間をたっぷりと確保してあることで、国民一人一人が、過去の自国の過ちと「向き合う」ことができる。

昨今、日本・中国・韓国など東アジア諸国の間では、歴史認識問題による緊張が高まっている。過去のことで現在および未来の国民たちが、互いにいがみ合うことほど悲しいことはない。こうして歴史認識に対する問題意識が高まっている今こそ覚悟を決めて、ドイツとヨーロッパの周辺諸国のように手を取り合って、未来志向の建設的な取り組みを進めていくべきではないかと考える。そのためにも、学校教育において、まずは過去の事実を、しっかりと「向き合う」という作業を行い、これから自分たちは何をしていくべきか、と考えられる生徒の育成に努めたい。